# 東大前身諸校における英学

川瀬　健一

**はじめに：**

明治 10 年（1877）４月に東京大学となった国立学校は、当初は学校の在り方が決まっていない模索の時期にあったため、明治２年の創立以来様々な学校名とその実際の在り方を変化させていた。明治２年 12 月（1870 年１月）に教育行政の中心だった「大学校」は大学と改められ、その南にあった開成学校は大学南校と改称された。そしてその後洋学・漢学併修の学校となったが、明治３年閏 10 月（1870 年 11 月）に「大学南校規則」が制定され、英・仏・独の三か国語による普通教育を目指す学校となった。それが翌明治４年７月（1871 年８月）には南校と改称され、明治４年 10 月（1871 年 10 月）には英・仏・独の三か国語による語学学校となり、さらに明治５年８月（1872 年 9 月）には、学制発布に従い名称を東京第一大学区第一番中学と変更し、その後明治６年（1873）４月には開成学校と名称を変え、7 月には主として英語による各種学校となり、一部の学生は新たに設立された東京外国語学校に編入された。この開成学校と医学校とが合併して明治 10 年に東京大学となったわけだ。

このような学校の変遷に伴って教育の実際も変化した。

本稿は、この大学南校から開成学校までの変遷の中で、明治３年から明治６年までの期間に、英語による欧米の学問の教授がどのように変わっていったかを考察するものである。

**１：大学南校の英学**

「大学南校規則」[i] によると、明治３年閏 10 月（1870 年 11 月）に事実上開校した大学南校は、英・仏・独三か国語による普通科と専門科が設けられていた。

そして、英語の普通科は次のように五等に分けられていた（括弧内は教科書及び内容）。

初等　綴字・習字・単語会話（ベランシュー人名）・数学（加減乗除）

八等　文典（英クワッケンボス小）・会話・書取・数学（分数比例）

七等　文典（英クワッケンボス大）・地理（英ゴルドスミット）・翻訳（和文を英文に翻訳す）・数学（開平開立）

六等　万国史（英ウィルソン）・作文・代数

五等　窮理書（英クワッケンボス）・束牘・幾何学

初等クラスにおいてアルファベットと簡単な英単語、そして会話を習い、西洋数学の加減乗除を習う。ついで八等では、文法を習い始めるとともに、英会話と英文書き取り、そして西洋数学では分数と比例を習う。さらに七等では、かなり英語力が向上したと見え、文法を引き続き学ぶとともに、和文を英文に翻訳することに加え、地理の講義が入ってくる。そして数学では開平開立、つまり平方根と立方根の計算練習へと進む。そしてさらに上級の六等では、英作文と代数、つまり数の代わりに文字式を用いた計算方法を学ぶとともに、ここで万国史という西洋を中心とした世界の主だっ

た国の歴史を学ぶ。最後の最上級クラス五等になると、窮理書つまり物理学を学ぶこととなり、数学は幾何学、つまり図形について研究する。束牘（そくとく）は実態不明であるが、牘（とく）とはもともと木簡を指す言葉で、後に文書や手紙をも指すようになる。束（そく）は、束ねる・集めるの意味であるから、多くの種類の書物を読む意味であろうか。

だが実際はもっと細かく学力に応じて９つにクラス分けされており、さらに学力で上下二つにわけて 18 クラスとし、それぞれを 25 名ずつのクラスに編成していた。そして春・秋の二度の定期試験で上のクラスに進級する形となっていた（齋藤修一郎著『懐旧談』[ii] による）。

専門科は法科・理科・文科の三科に分かれ、４等から１等に区分されていた。

だが実際には専門科に進めた学生はいなかった。「大学南校規則」制定以前の明治３年４月（1870 年 5 月）には 12 名が在籍したが、規則制定後の正則での学科からは専門科に進学する学力を有する学生は皆無であったのだ。

そして英語の学習は、外国人教師が教授する正則学と日本人教師が教える変則学に分かれていたが、明治３年 7 月（1870 年 8 月）に設置され、閏 10 月（1870 年 11 月）に入学した全国各藩からの貢進生はみな、正則で授業を受けるものと定められていた。つまり貢進生以外の、前身である開成学校以来の学生や、大学南校となってからの私費留学生は、正則・変則どちらかを選ぶものとなっていた。

だが貢進生が受講した正則での英学も、当初は、大部分の講義を日本人教師が行い、週に１・２回だけ英国と米国の教師によるリーディングの授業があったというのが実態であったようだ（貢進生・小村寿太郎の英文自伝[iii]）。

この原因は、外国人の英語教師の不足が主な原因であろう。

『東京大学 100 年史』[iv] 所収の「外国人教師一覧」によると、明治 3 年閏 10 月（1870 年 11 月）の開校時に在籍した外国人英語教師は、前年 2 年 4 月（1869 年 5 月）から開成学校に雇われ、大学南校開校の準備を担った、教頭の米国人フルベッキ Verbeck.G.F、3 年 5 月（1870 年６月）に雇われた英国人ダラス Dallas.C.H、3 年 8 月（1870 年９月）に雇われた米国人トムソン Thompson、3 年 10 月（1870 年 11 月）に雇われた英国人リング、さらに明治 3 年閏 10 月（1870 年 11 月）に雇われた英国人ローパー Roper の５人である。

明治 3 年閏 10 月（1870 年 11 月）の開校時の外国人英語教師は５人。これに対して貢進生の中で英語専攻生徒は 219 名。これ以外の生徒で正則を選んだ生徒を加えて、９クラスを能力別に上下二つのクラスに分けていたというから都合 18 クラス。全てのクラスを外国人英語教師による正則の授業とするには教師数は絶対的に不足していたのだ。

この状況が改善され、少なくとも上級のクラスが外国人英語教師による正則の授業となったのは、明治 3 年の末から 4 年の初めであろう。

明治 3 年 11 月（1870 年 12 月）には英国人グレゴリー Gregory.G.E が新たに採用され、外国人英語教師が 6 人の体制になっていた。

明治 3 年 11 月から 12 月末（1870 年 12 月から 1871 年 1 月）にかけて東京に滞在

し、福井藩藩校明新館に赴任する準備をしていた米国人グリフィス Griffis.W.E の日記[v] に、「大学南校で志願して英人語学教師ローバーの組などを通訳づきで一週間（1 月 23 日より 30 日まで : 明治 3 年 12 月 3 日より 12 月 10 日まで）教えた」との記述があるからだ。当時在職外国人英語教師の中でダラスとリングが士族青年に襲われ重傷で退職の上に、病気がちのローバーが欠勤[vi] 。外国人英語教師 6 名の中の 3 名が欠けて、グリフィスは臨時に午前午後も英語の授業を続けた。「ローバーの組」との記述があることは、すでにこのとき、ローバーが直接英語で授業をする組（つまり正則で英語教育を行う組）があったことを示すか。貢進生はすべて正則と定めたが教師が不足しており、増員した外国人語学教師が着任次第に順次上級クラスから正則に移って行ったのではなかろうか。

さらに正則での授業が拡大したのが、明治 4 年の 1 月から 3 月の事であったであろう。1 月には、英国人サンデマン Sandeman、米国人ハウス House.E.H、英国人ホール Holl[vii]の 3 人が採用され、2 月にも、米国人クロウニンシイルド Crouninshield、英国人ホワイマーク Whymark、英国人メージャー Major.A の 3 人が採用され、3 月にも、米国人ヴィーダー Veeder.P.V 1 名が採用され、10 人体制になっている（すでに 3 名、3 年 12 月―1871 年 1 月にトムソン、リング、ダラスが様々な理由で解雇）。18 クラスに対して 10 人の外国人英語教師が揃えられたのだから、かなり英語に慣れてきた上級クラスはすべて正則となったものと思われる。

だがすべてのクラスが正則での授業となるのは、明治 4 年 7 月（1871 年 8 月）に学校名が南校と改変され、さらに 9 月（71 年 10 月）に学校の一時閉鎖と教育課程の改変と在学生の選別が行われ、10 月（71 年 11 月）に英・仏・独三か国語による普通科の語学学校となってからである。

## ２：南校の英学

南校への学校改革の要点は二つあった。一つは、大学南校は漢学と洋学の併修の学校であったが、漢学の履修を止めて、英・仏・独三か国語による普通科の語学学校としたことだ。二つ目は、その際に日本人教師が指導する「変則」を廃止し、すべて外国人教師が指導する「正則」に改変したことだ。

明治 4 年 7 月から 10 月（1871 年 8 月から 11 月）の学校改革の背景は、一つは行政機構の変革であり、これまで文部行政を統括してきた「大学」が廃止されて文部省が設置されたことで、従来の文部行政の中での漢学派と洋学派の対立が解消され、洋学に基礎を置いた中央集権的教育制度の樹立による全国民教育体制の確立がなされたことであった。二つ目は、大学南校はその生徒が、前身の開成学校から引き継いだ学生と、さらに各藩からの私費留学生、そして各藩から選抜された貢進生とからなっており、年齢もその学力も、さらに学習意欲もバラバラであり、中には学校に来ずに遊郭に入り浸っている学生も多数いたからであった。このバラバラな学生を、学習成績と出席状態でふるいにかけ、計 970 名いた学生が 500 名に絞られたのだ。英語専攻でいえば、18 クラス 450 人ほどいた学生を 250 名に絞ったわけだ。そしてこの際に各科の日本人教師も絞られ、「全部正則とした際に日本人教師 50 余を廃止」と南校

は文部省に報告している（文部省往復明治 4 年甲 219 帖[viii]）。

そして英語科は英 1 から英 9 までの 9 クラスに能力別に編成された。

「南校規則」[ix]によれば、講義は午前 9 時から 12 時までと午後 1 時から 3 時までで、年 4 回の定期試験によって上級クラスに進級する仕組みになっていた。

南校における英学の実態については史料が二つ残されている。

一つは明治 5 年 4 月（1872 年 5 月）頃の学科表（『東京大学 50 年史』[x] 所収）であり、もう一つは明治 5 年 8 月（1872 年 9 月）に南校が学制改革によって第一大学区第一番中学へと改変された際に、文部省へと報告された「中学教科順序取調」（文部省往復明治 5 年甲 244 帖から 266 帖）に記された使用教科書の記録である。

**a:南校の英語科学習内容と教育方法**

南校の英語科の学科表は以下のとおり（括弧内は時間数）。

英１：文学（1）・作文（2）・文典（2）・読方（2）・修身学（2）・歴史（2）・地理学（1）・算術（3.5）・代数学（2）・幾何学（2）・化学（3）・生理学（2）・窮理学（2.5）・図画（1）・体操（3）

英２：文学（2）・作文（2）・文典（2）・読方（2）・書取（1）・修身学（2）・歴史（2）・地理学（1）・算術（3.5）・代数学（1）・幾何学（2）・化学（2.5）生理学（0.5）・窮理学（2.5）・図画（1）・体操（3）

英３：文学（2）・作文（2）・文典（2.5）・読方（2）・書取（2）・習字（0.5）・修身学（1.5）・歴史（1.5）・地理学（2）・算術（3.5）・化学（2.5）・生理学（1）・窮理学（3）・図画（1）・体操（3）

英４：作文（1.5）・文典（6）・読方（2）・書取（3）・習字（3）・読書（1）・暗誦（1）・修身学（2）・歴史（1.5）・算術（6）・体操（3）

英５：文典（5）・読方（2）・書取（3）・習字（4）・会話（3）・暗誦（1）・修身学（2）・地理学（2）・算術（6）・体操（3）

英６：文典（3）・読方（5）・書取（3）・習字（6）・会話（0.5）・綴方（2.5）暗誦（1）・算術（6）・体操（3）

英７：文典（2）・読方（6）・書取（2）・習字（6）・単句（4）・綴方（1）算術（6）・体操（3）

英８：読方（6）・書取（1.5）・習字（6）・会話（6）・綴方（4.5）・算術（3）・体操（3）

英９：読方（6）・書取（1）・習字（6）・単句（5）・綴方（6）・算術（3）・体操（3）

様々な学問が学科に入っている英３から英１が上級クラスで、ここではそれぞれ 4 人の外国人教師が図画体操以外の学科を教え、化学と窮理学では日本人教官２・３名が補助についている。在籍する学生の多くが、英語を学び始めてまだ 3 年程度であるにもかかわらず、語学だけではなく、歴史・地理・生理学などの諸学や代数や幾何という高度な学問を英語で学べていることに驚きを禁じ得ない。化学と窮理学のみ日本人教官が補助についていることは、これらの学問では特殊用語が多いため、外国人教師による英語での説明では十分に理解できないこともあるからか。

英５と英４とが数学と語学以外に地理・歴史・修身などが入る中級クラスで、ここではそれぞれ外国人教師１名と日本人教官１名が図画体操以外の学科を二人で教えている。

英８から英６が初級クラス。ここは数学と語学だけで外国人教師１名と日本人教官１名で体操以外の全学科を二人で教えている。

最後の英９は入門クラス。ここは日本人教官１名が体操以外の全学科を一人で教えている。

南校の学科表からわかることは、外国人教師による正則授業と言っても、初期の段階から「英語に堪能な」日本人教官を付けて、英語を母国語とする外国人教師と日本語を母国語とする日本人教官とのチームティーチングで授業が行われていることである。語学教育の在り方を考える上で興味深い。

南校での使用教科書もしくは課題は以下の通りである。

文典：英７から英５までは、「クェッケンボス氏 小文典」を使用し、英４からは教科書名が書かれていないが、おそらく「クェッケンボス氏 大文典」を使用したものと思われる。

作文：教科書ではないが、英７は小品文、英５は題に基づいた作文、英４以上は高等の文とある。

読方：英９では「サンデル氏第１リートル」、英８では「サンデル氏第２リートル」、英６では「サンデル氏第３リートル」、英５では「サンデル氏第４リートル」を使用している。

書取：英９では「喩言」、英８から英６では「小品文」、英５では「クェッケンボス氏 亜米利加歴史」を使用している。

綴字：英８では「ウェブストル氏 三綴以上」、英７では「ウェブストル氏 雑語」を使用。

暗誦：英９は単句、英８は単語、英７では単句、英６では単句小品文、英５では「サンデル氏第４リートル」を使用。

会話：英８・７では「ヘランジュ氏第２篇」を使用。

幾何学:英２では「ロビンソン氏著 第１級」、英１では「ロビンソン氏著 第 32 題」。

代数：英２では「ロビンソン氏著 加法」、英１では「ロビンソン氏著 除法」を使用。

算術：教科書ではないが、英９は除法、英８は乗法迄、英７では「フェルテル氏除法の始」を使用、英６は「英モニー」、英５は加減乗除当時復習、英４では「ペルタル氏著立法」を使用。

修身学：英３では「ウェーラント氏著 知覚ノ理」、英２では「ウェーラント氏著 善悪ノ理」、英１では「ヘーブン氏著自由ノ理」を使用。

地理学：英７では「キュヨ氏両半球」、英６は「キュヨ氏初歩」、英５は「キュヨ氏亜非利加歴史」、英４は「マクネリー氏著 地理ノ部フィチカーレ」、英３は「ゴルドスミッス氏著 仏蘭西」、英２は「ゴルトスミス氏著 欧羅巴ノ部」、英１は「コルトスミッス氏著 亜細亜ノ部」を使用。

歴史学：英５では「パレー氏著　万国史初歩」、英４では「パレー氏著　亜拉比亜ノ

部」、英３では「パーレー氏著　希臘」、英２は「ウーストル氏著　英国ノ部」、英１では「ウィルソン氏著　千五百年代」を使用。

生理学：英４では「カットル氏著血液循環ノ部」、英３は「カットル氏著消化ノ部」、英２では「ダルトン氏著食物ノ部」、英１は「タントル氏著血液循環ノ部」を使用。

窮理学：英５では「ウィルソン氏初歩」、英３は「ガノ氏著機械力ノ部」、英２は「スチール氏著機械力ノ部」、英１は「クェッケンホス氏著滑車ノ部」を使用。

化学：英３は「硫黄ノ部」、英２は「バーケル氏著硫黄」、英１は「バーケル氏著水」を使用。

それぞれの教科書を特定するのは難しいが、諸学の教科書の表題を見ると、英３以上のクラスの内容は、今日でいうと高等学校の内容を教授していたと思われる。

「文部省往復」の綴りを読んでいると、しばしば教科書として使用された英書が 50 部ほどの単位で購入されている。当時、英書は高価だから、学生で所有することの出きるものは限られていたであろう。そのため大量に学校が購入しておいて貸与したものか。現在の東京大学総合図書館の書庫をしらみつぶしに探せば、当時の教科書の一部なりとも確認できるのではなかろうか。

また作文の項を見ると、すでに中級の英５で題に基づいた英作文が実施されており、英４以上は高等な文とあるので、英語を学び始めてまだ２・３年の学生が、すでに教師から与えられた題に基づいて英作文を行ったり、さらに学生それぞれの自由作文を行っていた事が窺え、すでに学科表のところで指摘したが、当時の学生の英語力の高さには驚かされる。

この作文指導の成果の一端が、東京第一番中学時代の最後の、明治 6 年（1873） 2 月 15 日に、「日本アジア協会」例会で、「大学南校のハウスと五人の学生が再登場し、五人の学生は『琉球諸島の言葉に関する五つの論考』を読み上げた」という出来事に繋がっていることと思われる[xi]。

また前記のラトガース大学アレクサンダー図書館蔵・グリフィスコレクションの内の「スチューデントエッセイ」Student Essays 319 編も、第一番中学、そして開成学校時代のグリフィスの担当した作文授業の教え子たちのものと思われる。南校時代は作文を担当していたのはハウスであり、これは東京第一番中学となってからも続いた。だがハウスが明治６年（1873） 1 月 26 日付で退職。その後はグリフィスが代ったものと思われ、その後開成学校に改変されても作文はグリフィスが担当した。確認したところ、83 名の学生の記名がある作文が含まれており、その内の自伝は Edward（齋藤修一郎） のものを含めて 27 編。そのうち日本名の記名があるものが 14 編。英語の変名の記名があるものは３編。無記名が 10 編。319 編には幾つかのテーマがあり、グリフィスが与えたテーマを学生が選んで書いたものと推定される。その中には、「アイヌ」「アート」「自伝」「子供の遊び」「夢」「昔話」「外国人－初期の印象」「歴史叙述」やさまざまな日本の文化や生活習慣についてのテーマが含まれ、明治初期のエリートの若者の人生観や知識などを知る興味深い資料である。

**ｂ：南校での英学教師の実態**　南校での英学の実態を考える最後に、担当した外国人教師や日本人教官がどのような人たちであったかを考察しておこう（括弧内は担当

教科。英４以下は二人で全教科を担当)。

英１から３：フルベッキ（代数学)、グリフィス（生理学・化学・地理学・修身学)、ヴィーダー（算術・幾何学・窮理学)、ハウス（読方・文典・作文・歴史学)、宇都宮義綱（化学)、柳本直太郎（窮理学)、高橋浩（図画)、出浦清悟（？)。

英４：スコット、鈴木知雄。

英５：ウィルソン、河野径徳。

英６：ホワイマーク、坪井光次。

英７：メイジャー、松井永観。

英８：ホール、鴻池宜之。

英９：伊藤保義。

外国人教師は９名。日本人教官は 10 名でそのうちの高橋浩は図画担当なので、英語で語学や様々な学問を教えた日本人教官は高橋以外の９名である。

まず外国人教師を見ておこう。

実はこの９名の内で､来日前の経歴や帰国後の経歴などが詳しくわかっているのは、フルベッキ、グリフィス、ヴィーダー、ハウス、そしてウィルソンの５名だけである。

なぜなら外国人教師の多くは外国人居留地にいた外国人を適宜採用したという者が多く、その経歴や辞めた後の履歴などは残っていないからだ。わかっている５名のうちのフルベッキ、グリフィス、ハウスの３名は、後に東京大学となるこれらの学校の設立や運営に深く関わった人物なので、研究者によってかなり履歴が調べられた。またウィルソンとヴィーダーは、近年「お雇い外国人科学教師」ということで、研究者によって精力的にその履歴が調べられた。

だがこれ以外のスコット、ホワイマーク、メイジャー、ホールについては採用日時と解雇日時がわかるだけで、その履歴がわかっていない。

詳しい経歴の分かっている５名について、概略を記しておく。

**１：フルベッキ**：(当時 41 歳）Guido Fridolin Verbeck(1830-1898) 代数学担当 1830 年１月 23 日。オランダ、ザイストに生まれる。1852 年９ 月２日、オランダを離れ渡米。1854 年夏に外国伝道を志し、1856 年９月、ニューヨーク州オーバン神学校に入学 (26 歳)。1859 年３月に牧師に任命され、オランダ改革派教会に移籍。4 月 18 日、マリア・マニョンと結婚。5 月７日、日本に向けニューヨークを出港。11 月７日、長崎上陸。以後、崇福寺にて多くの学生に英語を教授。1864 年８月から幕府の教習所・済美館で英語を教え始める。1868 年１月、長崎の佐賀藩校蕃学稽古所の教師となる。1869 年 2 月新政府から学校設立の相談を受け 3 月東京に出発。4 月、開成学校の語学・学術教師となる。1870 年 11 月、大学南校の教頭。1873 年９月、 開成学校教頭を辞任。その間に欧米使節団構想を政府要人（大隈）に伝え、使節団が具体化した折にはその詳細について諮問を受ける（⇒岩倉使節団)。1873 年 12 月に開成学校を退任して以後は、法律顧問として正院や元老院に勤務し、外国の法律の翻訳や多くの法律の草案作りに従事。1877 年 10 月に元老院を去って後、元の宣教師に戻る。1898 年３ 月、赤坂葵町の自宅で死去（68 歳）[xii]。

２：グリフィス：（当時 28 歳）William Elliot Griffis(1843-1928) 生理学・化学・地理学・修身学・文学担当 1843 年 9 月 12 日、アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィアに生まれる。 1860 年高校を中退し、第一オランダ改革派教会のバイブル・クラスで教え始める。南北戦争が始まった後、奴隷制度問題への強い関心からペンシルベニア士官候補生に志願し、1863 年ペンシルベニア市民軍第 44 連隊の一員としてゲチスバークの戦いにも参加。1865 年、ラトガース大学科学科に入学し 1869 年卒業。その間に日本人留学生、横井左平太・太平兄弟に英語を、日下部太郎（旧名八木八十八ーやぎやそはち）にラテン語を教授。明治 4 年（1871 年）に日本に渡り、福井藩の藩校明新館で同年 3 月 7 日から翌年 1 月 20 日まで理科（化学と物理）を教えた。明治 4 年 7 月（1871 年 8 月）、廃藩置県により契約者の福井藩が無くなった。明治 5 年 1 月（1872 年 2 月）、フルベッキや由利公正らの要請により 10 ヶ月滞在した福井を離れて南校（東京大学の前身）に移り、 明治 7 年（1874 年）7 月まで物理と化学、精神科学など教えた。明治 8 年（1875 年）帰国後は牧師となるが、米国社会に日本を紹介する文筆・講演活動を続けた。1876 年にアメリカで刊行した The Mikado's Empire (『ミカドの帝国』あるいは『皇国』と訳される)は、第一部が日本の通史、第二部が滞在記となっている。1928 年 2 月 5 日避寒先のフロリダ州ウインター・パークで死去（85 歳）[xiii]。

３：ハウス：（当時 35 歳）Edward Haward House(1836-1901) 讀方・文典・作文・ 歴史担当 1836 年 10 月 5 日にアメリカのボストンに生まれる。1850 年から 3 年間、音楽の勉強をし、作曲もした。1854 年、「ボストン・クリエール」紙の音楽・演劇の批評家となり、1858 年には、「ニューヨーク・トリビューン」紙の記者となり、音楽と演劇の批評を担当。1859 年には、ジョン・ブラウン奴隷廃止運動の通信員として戦地に派遣され、南北戦争（1861－1865）に際しては、北部連合軍の通信人として活躍。この間の万延元（1860）年に江戸幕府が通商条約批准のため初めてアメリカに派遣した「遣米使節」の報道を通じ日本に興味を持ち、日本に同情的な評論を執筆。南北戦争後の 3 年間は、ロンドンとニューヨークで劇場の管理をしたが、1868 年に再び「ニューヨーク・トリビューン」紙の記者となり、明治２（1869）年暮れに「ニューヨーク・トリビューン」紙の東京特派員として日本に派遣され、翌 1870 年には「ニューヨーク・タイムズ」の特派員も兼ねた。来日後、特派員の傍ら明治 4 年 1 月より大学南校で英語学・英文学教師となって教壇に立つ。この間明治 5 年に起きたマリア・ルス号事件では自国のデロング駐日公使を痛烈に批判し、これが原因でアメリカから抗議され、明治 6 年 1 月 28 日に持病を理由に満期解雇。明治政府の台湾出兵には従軍取材し、日本で新聞を発行し、折に触れアメリカで論文を発表し、通商条約にある治外法権や関税自主権の是正に付いて明治政府の立場を文筆をもって代弁するジャーナリストでもあった。1901 年 12 月 18 日東京の自宅で死去（65 歳）[xiv]。

４：ヴィーダー：（47 歳）Peter Vrooman Veeder(1825-1896) 算術・幾何学・窮理学担当 1825 年 6 月 23 日ニューヨーク州ロッテルダム生まれ。父は合衆国最初の大規模な鉄道を建設。1846 年 Schenectady の Union College を首席で卒業。以後 7 年間各地で教師。1857 年にピッツバーグの Western Theological Seminary で神学を学

んで卒業。牧師となり、ニューヨーク州の Kingsborough 教会牧師、1857 年カリフォルニア州サクラメント、1858 年 Napa の First Presbyterian Church 牧師（－1865 年７月）。以後数年間サンフランシスコの City College 学長。1870 年フィラデルフィアの Commissioner to the General Assembly。同時に神学博士授与。日本政府の招きを得て 1871 年から 1878 年まで東京で教える。帰国後は、1880 年ピッツバーグの Western University の数学教授、1882 年イリノイ州の Lake ForestUniversity の天文学教授などを務めた。1896 年８月 11 日バークレイの自宅で死去。日本における気象研究の先駆け[xv]。

５：ウィルソン：（30 歳）Horace E.Wilson（1842-1927）メイン州 Gorham 生まれ。サンフランシスコで死去。1863 年 3 月 16 日ペンシルベニア州市民軍に参加。1866 年 3 月 17 日満期除隊。23 歳。メイン州で大学に入学する直前に志願して軍隊入り。このため大学は出ていない。しかし開成学校同僚で友人の W.E.パーソン Parson.W.E 74.9-78.7 開成学校・東大理学部で数学・理科を教授）の尽力により 1876 年 6 月 28 日修士号を授与される（ペンシルベニアの Gettysburg College から）。帰国後はサンフランシスコの Mechanics'Institute 図書館に勤務。図書主任⇒理事[xvi]。

この 5 人の経歴や業績を見れば、彼らがかなり深い学識を持っていたことが窺われる。このためであろう、このうちの４人は明治 6 年に事実上の大学の内容を持つ各種学校としての開成学校が開校した際にも、そのまま外国人教師として継続して雇われている（ハウスは上記のように明治６年―1873 年１月に第一番中学を辞職）。

またグリフィスとヴィーダーとウィルソンの 3 人は、フルベッキの斡旋により米国の大学関係者の人選により来日したことが知られている。これら当該国の大学関係者の人選で来日して教師となった者には、日本の居留地にいて教師として採用された者とは異なり、文部省との契約において年俸だけではなく、当該国から日本までの旅費と辞職後に帰国する際の旅費まで決められていることが知られている。

明治 5 年 4 月 12 日の「南校御雇教師月給明細書」（「文部省往復明治 5 年乙 572―576 帖」）にはこの 3 名の箇所に、グリフィスは「但旅費 350 両相帰国の節は遣し申事。右フルベッキより申出る」、ヴィーダーは「但旅費 400＄遣シ帰国の節は遣し申事。右フルベッキより申出る」、ウィルソンは「但旅費 500 元相渡し妻子つれとの事。帰国の節は遣し申事。右フルベッキ申出る」と旅費の金額と斡旋者名が明記されている。

この史料を見ると、他に旅費が明記されている英学教師に、スコットがいる。彼の項には「但旅費 250 元相渡し帰国の節は遣わし申事。右フルベッキより申出る」と記されている。したがってスコットもまたフルベッキの斡旋で米国より来日したことがわかる。だが他のホール、メイジョル、ホワイマークの 3 名には旅費の記述はないことから、この 3 名は日本の居留地に住んでいたものを採用したことがわかる。

南校の英語外国人教師９名のうち、4 人はフルベッキの斡旋により米国の大学関係者の人選によって来日しており、これにフルベッキとハウスを加えた６人が上級クラスである英１から３と中級クラスである英４・５を担当し、初級クラスである英６・７・８を居留地住人から選んだ、教員としての経験もなく学識も浅いであろう 3 名に担当させたということがわかるのである。初級はいわば語学と算数の初歩であり、英

語を母国語とし初等中等教育学校を卒業した人物ならなんとかこなせるが、中級上級になると学問的要素が強くなるので、ある程度の学識と教師経験を持ったものでなければ務まらないということであろう。

日本人教官 10 名の経歴も多くは不明である。

ある程度判明しているのは、英１から３の上級クラスで化学を担当する宇都宮義綱と、同じく窮理学を担当する柳本直太郎、そして中級クラスを担当する鈴木知雄の 3 名だけである。他の 7 名は全く不明である。

**１：宇都宮義綱**：（38 歳）1834-1902　通称鉱之進。幕末・明治期に活躍した化学技術者である。名古屋市教育委員会が出生地（名古屋市中区新栄三丁目 15）に設置した史跡標札には、下記のように紹介され顕彰されている。

宇都宮三郎出生地

天保五年（1834）尾張藩士神谷義重の三男としてこの地で生まれた。藩校明倫堂に学び、後に、上田帯刀の門に入り、西洋砲術と火薬の研究に没頭し、嘉永年中[xvii]（1848～1854）着発弾を造ることに成功した。安政四年（1858）西洋砲術研究のため脱藩した後、幕府洋書調所製煉方を経て、幕府陸軍所で軍制改革に参画した。明治維新後、開成学校教官などを経て、明治十五年（1882）工部大技長になった。セメントや耐火レンガの製造、醸造法の改良など、わが国化学工業界の先駆者として偉大な貢献をした[xviii]。

宇都宮は明治 5 年当時 38 歳。留学はしていないが、西洋砲術と火薬の製造から入って化学知識を獲得したものか。最初はオランダ語であったわけで、どこで英語を学んだかが不明であるが、興味深い。経歴からして化学知識が深く、化学教師であるグリフィスの助手として講義にあたったものと思われる。

**２：柳本直太郎**：（24 歳）1848-1913 名は直満、通称は直太郎、久斎と号する。越前福井に生まれる。父は柳本久兵衛で禄八石二人扶持、小坊主三人扶持だった。その才が認められ、文久元年三月(1861)に英語の学習を命じられ、翌年蕃書調所に入る。慶応元年(1865)に横浜で外人相手に英語の修業を命ぜられ、三年四月アメリカへ留学したが、足軽の身で洋行したものは稀であった。明治になって華頂宮博経親王の在米留学中の世話役を勤め、帰朝後文部省に入って東京外国語学校長になり明治二十七年から三十年までは第三代名古屋市長であった。年六六で没[xix]。

Wikipedia 情報では、文部中助教のまま明治 3 年 7 月に華頂宮博経親王の随行員として渡米し、ブルックリン工科大学で入学予備教育を受けたが、母が病にかかり余命わずかとなったことを受けて明治 5 年 1 月（1872 年２月）に帰国、とある。

柳本は当時 24 歳。工科大学の予備教育を受けたということなので窮理学を担当したヴィーダーの助手ということであろうか。

**３：鈴木知雄**：（17 歳）1855-1913 別名は鈴木六之助。父は仙台藩士大山新九郎。鈴木民之助の養子となる。慶応 3 年(1867 年)高橋是清らと米国に留学。帰国後、共立学校創立に参画。のち一高教授、日本銀行出納局長を務めた[xx]。

鈴木と高橋との米国留学の次第は高橋の自伝に詳しい[xxi]。

二人は勝海舟の息子小鹿に随行して、一行はこの三人以外に仙台藩士富田鉄之助、

庄内藩士高木三郎の 5 人だった。サンフランシスコには 1867 年 9 月 15 日着。二人は横浜のアメリカ人商人であるヴァンリードの両親がサンフランシスコに住んでいるので、そこでホームステイ留学をする予定だったが、仙台藩が出した留学費用をヴァンリードが着服した模様で、学校には行かせてもらえずに家の手伝いばかりさせられていた。結局学校に行くこともできないまま、明治維新の激変の情勢を聞いて帰国することとなり、1868 年 11 月 1 日にサンフランシスコを出港し、12 月 31 日に横浜に着いた。

高橋と鈴木の米国留学は、わずか 1 年と少しで、正式な勉強もできなかったが、アメリカ人の中でもまれたお蔭であろう、会話だけは不自由しない状態であったものと思われる。帰国後の二人は外務官僚森有礼の家に寄宿し、その後大学南校ができたので、生徒兼教官手伝いとなって入学した。高橋是清はその後明治 4 年 5 月 19 日（1871 年 7 月 6 日）に退職して唐津藩の英語学校教師として赴任したが、鈴木はそのまま大学南校にのこり、やがて文部省にも入って大学南校・南校教官として勤めた。

英会話には堪能であったので中級クラスの英 4 を担当し、米国から招聘された外国人教師スコットの助手を務めたということか。

他の英語での講義を担当した 6 人、出浦清悟、河野径徳、坪井光次、松井永観、鴻池宜之、伊藤保義は経歴も不明である。出浦は上級クラスの英 1 から 3 を担当したことは学科表でわかるが担当教科も不明である。最上級クラスを担当するのだからかなり英語の読み書き・会話にも堪能であろうが、経歴は全くわからない。他の 5 人は中級・初級クラスの外国人教師の助手を務めたのだから、それなりに英語に堪能ではあろうが、彼らもどこで英語を学んだのかすら不明である。

彼ら日本人教官の経歴の調査は、経歴不明の 4 人の外国人教師の調査も含めて今後の課題である。

### ３：第一番中学の英学

明治５年８月３日（1872 年 9 月 5 日）に「学制」が発布されて、南校は第一大学区第一番中学校へと名称変更された。そして、外国人教師による正則の語学学校としての体制は整備されたようだ。この学校の実際を示す史料は少ない。明治 6 年（1873 年）3 月の「第一番中学一覧表」[xxii]だけである。

英語科では、学制は上等中学（１から６級）と下等中学（１から６級）、予科（１・２級）に改められ、南校の各クラスは、英１は上等中学の第３級、英２は上等中学の第４級、英３は上等中学の第５級、英４は上等中学の第６級に改められ、英５は下等中学の第１級、英６は下等中学の第３級、英７は下等中学の第４級、英８は下等中学の第６級に改められ、英９は予科の第１級となった。

さらに教師にも移動があったようで、「南校外国人教師一覧」（『東京大学百年史』所収）によれば、ホール、メージャー、ホワイマーク、初級クラスの英８と英７と英６を担当していた外国人教師３人が明治 5 年 8 月（1872 年 9 月）で解雇となっている。初級クラス担当の 3 人が皆解雇となったわけだ。だが同時に事情は不明だが、中級クラスの英５を担当していたスコットも明治 5 年 8 月に解雇となっている。外国人教師

9 人のうち、4 人が一度の解雇となった。これも理由は不明である。

そして彼らの補充であろうか、明治 5 年 8 月に米国人ワシントン Washington.T.B と明治 5 年 9 月（1872 年 10 月）に米国人マッカーティー McCartee.D.B が相次いで採用された。第一番中学の英語科の外国人教師は 7 人となったわけだ。

翌年明治 6 年（1873 年）3 月の「第一番中学一覧表」では、英語科の外国人教師は 1 人増えて 8 人。そのうちのフルベッキは教頭とだけあって担当教科はない。他の 7 人のうち、物理学を担当するのはヴィーダー、化学を担当するのがグリフィス、文学を担当するのが、マッカーティーとウィルソン、そして語学担当が、グレー、クレッセー、ワシントンの 3 名である。

だがグレーとクレッセーの 2 名は、「開成学校・東京開成学校教師一覧」[xxiii]にも名前がなく採用年月日すら不明である。

だが教頭のフルベッキを合わせれば 8 人となり、彼が語学もしくはこの一覧にない数学を担当したとすれば、南校の英語科で外国人教師が担当した 8 クラスには十分な人数である。つまり上級の 3 クラスは第一番中学開校後も相変わらず、フルベッキ、グリフィス、ヴィーダーが担当し、他の 5 クラスを、前からいたウィルソンに新たに入ったワシントンとマッカーティー、さらにグレー、クレッセーの 5 人が担当したと考えればつじつまはあう。

そしてもう一つ大きな変更点は、10 人いた日本人教官がわずか 2 名に削減されたことだ。残ったのは英 4 を担当していた鈴木知雄と英 5 を担当していた河野盛之進（径徳）。化学を担当していた柳本直太郎は学長となったあと小督学となって文部省本省に転出し、明治 7 年（1874 年）5 月には東京外国語学校校長に就任している。また窮理学を担当していた宇都宮義綱はもともと技術者であり後には工部省で技師長として活躍していることから、この時期に工部省に転出したものか。したがって第一番中学では、南校では上級クラスの窮理学と化学は担当の外国人教師に日本人教官が助手としてついていたのが、外国人教師だけによる講義に変わったのではないだろうか。そして日本人教官が担当するのは 2 人だけだから、初歩の予科を担当したものか？

つまり第一番中学はほぼ完全に外国人教師による正則の語学学校兼各種学校となったのだ。

この学校の学科表は前記の「第一番中学一覧表」にクラスごとの教科名と時間数だけが記されている。予科は習字、綴字、読方、譜誦、算術、会話、書取、文法という形の語学と数学の初歩で学科が構成され、下等中学ではまず 6 級で作文が追加され、5 級で地理が、4 級で修身、図画が加わり、3 級で幾何、代数が加わり、2 級で史学・博物、窮理がさらに加わり、1 級ではこれに化学が加わる。そして上等中学では語学は文法と作文のみとなって、地理、修身、図画、幾何、代数、史学、博物、窮理、化学が学科の中心となり、4 級からは経済、3 級からはラテン語が加わり、次第に欧米の大学の様相を呈するものとなった。つまり第一番中学の設立は、当初から近い将来における大学設立が視野に置かれ、その学科教授はすべて外国人教師によるものとなったのだ。

そしてその後学業が進むにつれて明治 6 年（1873 年）3 月には最上級の 2 級クラス

ができ[xxiv]、またその前にハウスが明治６年１月 28 日付で退職し、この代人として「英人キーリングを 2 月 1 日から 7 月 31 日まで雇入れたが、同人は案外学力無く、3 月 8 日までをもって御雇相止め。ついては米人ワイラルと申す者を一か月二百円で 3 月 21 日より 9 月 20 日まで六か月間代請けとして御雇入れ。[xxv]」と記録にある。ハウスの代人を急遽採用したが学力が及ばずわずかひと月で解雇し、さらに代人を雇ったということだ。だがこの二人目の代人ワイラルは明治 6 年 3 月の「第一番中学一覧表」にも名前がないので、さらに代人を雇い入れたということか。

結局ハウスが担当していた讀方・文典・作文・歴史は学識のある従来からの教師が担当教科を越えて担当し、新たに採用した 4 人で残りを分担してハウスの分を担当した教師の負担を減らし、新たに採用された経済、ラテン語学科はこれに応じて教えられる教員を採用したり、これら学識深い教師たちが分担したりしたものであろうか。

この体制に大変革が生じたのが、明治 6 年（1873 年）4 月の開成学校への名称変更と、7 月には英学を法科・理科・工業学に再編し、仏学・独学は英学への編入又は、仏学⇒諸芸学、独学⇒鉱山学に再編。下等中学１級以上のものは志願により各専門学科へという体制変更だったのだ。ここに日本に初めて大学ともいえる主に英語で外国人教師が講義する各種学校が誕生した。そして下等中学２級以下は新たに設立された東京外国語学校へと編入されたのだ。

この事実上の大学である開成学校の英学の実態については、すでに紙数が尽きているので機会を改めて論じたい。

（本稿は、2018 年 4 月 7 日の日本英学史学会第 520 回本部例会報告、「齋藤修一郎と英学②－大学南校から開成学校時代―（１）大学南校」と、2019 年 12 月 7 日の日本英学史学会第 534 回本部例会報告、「齋藤修一郎と英学②－大学南校から開成学校時代―（２）南校・東京第一番中学時代」を基本とし、新たに教員の経歴や採用履歴などの考察を加えてまとめたものである）

---

[i] 『東京大学 100 年史　通史１』1984 年刊所収。

[ii] 齋藤修一郎著『懐旧談』明治 41 年 12 月サンフランシスコ・青木大成堂刊。

[iii] 英文自伝。ラトガース大学アレクサンダー図書館蔵・グリフィスコレクションの内の「スチューデントエッセイ」Student Essays 319 編の第 28 編目の作品。

[iv] 『東京大学百年史　通史一』1984 年刊。

[v] ラトガース大学アレクサンダー図書館蔵・グリフィスコレクション内。参照した日記は福井大学のサイトに掲載されたもの。福井大学総合図書館サイト：
http://www.flib.u-fukui.ac.jp/elib/griffis-m/griffis-c/J-5/index.htm

[vi] 「文部省往復」明治 4 年甲 P 172。明治 4 年 12 月 8 日付の伺い。グリフィスが大学南校の授業を手伝った日から約 1 年後の史料であるが、病気がちで欠勤が多かったのでこの日をもって解雇とのこと。

[vii] 『東京大学 100 年史』所収（ｐ189）の「南校外国人教師一覧」では、Holl の綴りである。

[viii] 文部省往復は、文部省と大学南校などの学校との間で交換された多くの種類の往復文書の写しの綴りである。明治 4 年から現在のものまで残され、東京大学文書館サイトで pdf 版にて全面公開されている。https://www.u-tokyo.ac.jp/history/S0001.htm

[ix] 文部省往復明治 4 年甲 141 帖から 152 帖。

[x] 『東京大学五十年史』1932 年刊。元史料は「文部省雑誌」か？

[xi] 楠家重敏著『ジャパノロジーことはじめ―日本アジア協会の研究』（2017 年晃洋書房刊）掲載。

正しくは大学南校ではなく、第一番中学である。そして日付もグリフィスの日記によれば２月 16 日土曜日で、また読み上げたのは、グリフィス日記ではハウスである。グリフィス日記ではこの学生を「1st class scholars」と記す。第一番中学の英語最上級クラスということだ。当時の最上級は３級なので、明治 5 年 8 月の南校名簿英１在籍 21 名の中の５人であろう。だが、琉球語を知っている可能性のある薩摩出身学生は英 1 のクラスには一人もいない。ハウスが英作文の課題として「琉球語」について書くことを求めたか。ここで参照したグリフィス日記とは 1872.1.23～1874.9.17 の東京時代の日記。「W.E.Griffis' Journal」。化学史家の蔵原三雪氏が翻刻したもの（武蔵丘短期大学紀要第 12 巻 2004 年・第 13 巻 2005 年に掲載）を使用。

[xii] グリフィス著 村瀬寿代訳『日本のフルベッキ』2003 年洋学堂書店刊、所収年表による。

[xiii] 山下英一著『グリフィスと福井【増補改訂版】』2013 年エクシート刊所収の年表による。

[xiv] 『近代文学研究叢書５』1957 年昭和女子大学刊、所収の年譜などによる。

[xv] 『増訂 お雇い米国人科学教師』渡辺正雄著 北泉社刊 1996 年による。

[xvi] 『増訂 お雇い米国人科学教師』渡辺正雄著 北泉社刊 1996 年による。

[xvii] 名古屋市が設置した標柱札に、嘉永年中と記される。

[xviii] 「お雇いフランス人教師 P. J. ムリエの面影」加藤詔士著（法学部・教授）愛知大学教職課程研究年報第 4 号 2014 刊。
https://taweb.aichi-u.ac.jp/kyosyoku/pdf02/work201403.pdf が引用した、豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へ－近代技術を拓いた男・宇都宮三郎－』（豊田市教育委員会、平成 13 刊）による。宇都宮には交詢社編『宇都宮氏経歴談』という自伝もあり、これは国立国会図書館のデジタルアーカイブスで見ることができる。

[xix] 掃苔帳による。
http://soutairoku.com/01_soutai/08-1_ya/05-1_na/yanagimoto_naotarou/yanagimoto_naotarou.html

[xx] 「コトバンク」掲載の日外アソシエーツ「20 世紀日本人名事典」（2004 年刊）の鈴木知雄の項、および、「人事興信録」データベース https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who1-3297 による。

[xxi] 高橋是清談・上塚司編『高橋是清自伝』昭和 11 年刊。今は中公文庫で読める。また塩崎智著「1872 年 3 月 26 日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査」（「拓殖大学人文・自然・人間科学研究」№44 2020 年刊掲載）にも詳しい。

[xxii] 国会図書館デジタルコレクション。http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812886

[xxiii] 『東京大学 100 年史』所収。

[xxiv] 明治６年三月文部省雑誌１号にある。

[xxv] 文部省往復明治６年甲 309 帖。明治６年３月 29 日 第一番中学より文部省への報告。